

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：34428

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K03304

研究課題名(和文) 東ティモールにおける社会的紐帯の生成と維持に関する人類学的研究

研究課題名(英文) Anthropological Study on the Formation and Sustainance of Social Ties in Timor-Leste

研究代表者

上田 達 (Ueda, Toru)

摂南大学・国際学部・教授

研究者番号：60557338

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は東ティモールの首都ディリにある集落において、どのような社会的紐帯が形成・維持されているかを明らかにした。調査を実施した集落は、東ティモールが主権回復を果たした2002年以降に、国内の様々な地域からの移住者が居住するようになった集落である。この集落への移住に際して、故郷の血縁や地縁にもとづく社会関係だけでなく、独立闘争に参画したときの社会関係が大きな役割を果たした。これらの既存のものに加えて、信仰が集落の人々の関係性を創出している。人口の99%を占めるカトリック信仰とkulturaと称されるローカルな信仰との共存が、人々の共同性の想像に際して大きな役割を果たしていることが看取された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、東ティモールにおける共同性の想像のあり方を現地調査から明らかにした。まず、出身地や血縁を包摂する社会的紐帯の所在を指摘することが出来る。2006年にディリで勃発した暴力的な衝突は国内の東西問題として描き出されることが多いが、それだけにとどまらない重層的な社会的関係が看取された。次に東ティモールにおける信仰の動態である。東ティモールはアジアの中でもカトリックが広く普及した国として知られるが、その広がりにはローカルな信仰が付随していることが指摘できる。地域によって異なるkulturaやlisanがカトリックと共存しており、それらは互いに参照される形で並びに共有されている。

研究成果の概要(英文)：This study focused on how social ties are built and maintained in urban settlements in Timor-Leste. The settlement in Dili, the capital of Timor-Leste, has been inhabited mostly by migrants from various parts of the country since 2002, when Timor-Leste became the independent nation state. In their migration, not only kinship and neighborhood at their home places, but also clandestine pro-independence network played a major role. In addition to these existing ones, faith created relationships among the people of the settlement. It is clear that the cohabitation between Catholicism, which accounts for 99% of the population, and the local faith, referred to as kultura or lisan, plays a major role in imagining the communal nature of the people.

研究分野：文化人類学

キーワード：東ティモール ディリ カトリック kultura 青年の十字架 都市集落

1. 研究開始当初の背景

グローバル化が進行する現代世界において、国民国家を単位とした世界の枠組みは変容を迫られつつある。均質な国民の存在を前提とした「国民を単位とした思考の枠組み(national order of things)」(Malkki 1995)は、境界を越える人やモノや情報の往来によって、確かに無効化されている側面がある。しかし、看過できないのは国民やネーション、エスニシティといった既存の概念がグローバル化の進行する過程において再び求心力を帯びている点である。本研究は、2002年に主権を回復して新しい国民国家の一つとして誕生した東ティモールにおいて、東ティモール国民という概念が人々の生活の中でどれほど意味のあるものとなっているかを人々の社会生活の中から見定める試みである。

本研究は、首都ディリにある集落に着目して、集落における人々の社会的紐帯のありかたのなかで、国民という共同体がどのように定位されているのかを示す。特にディリでも地方からの移住者が多い西部コモロ地区のモタムティン集落に視座を据えて、多元的な紐帯の在り方を明らかにする。

2. 研究の目的

2015年のセンサスによると、東ティモールの首都ディリの人口の約40%は、独立後の移住者である。都市への人口流入が進む一方で、居住するための土地に関する法制度は未整備のままである。独立から10年以上が経つ今も、ポルトガル植民地時代、インドネシア占領時代のそれぞれの時代の法制度を継承する新しい制度は確立していない。こうした状況において、居住に必要な土地や家屋は既存の社会関係にもとづいて、売買ないしは貸借されている。本研究は、ディリでも地方からの移住者が多い西部コモロ地区の一集落における居住に際して、人々がどのような社会関係を取り結んでいるのかを明らかにする。

コモロ地区のモタムティン集落は出身地や母語が異なる人々が混在して暮らす都市集落である。出自に基づく社会的な差異は、2006年に首都ディリを中心に勃発した暴動事件の主因とされる。特に、東部(*lorosae*)と西部(*loromonu*)は、言語学的な差異に基づく文化的区分とされ、対立を導く文化的原因として説明されることが多い。しかし、衝突事件後も、東西の人々が混在する集落で社会生活が存続していることが示すように、出自による紐帯とは異なる複数のつながりが住民の間にとり結ばれている。これらの動態を明らかにすることが本研究の目的である。

3. 研究の方法

東ティモールでの現地調査は、2017年8月-9月(15日間)、2018年2月(9日間)、同8月-9月(13日間)、2019年8月-9月(12日間)にそれぞれ実施した。2020年度2月に予定していた調査日程はコロナ禍によって中止とせざるを得ず、それ以降は現地渡航が困難となった。

東ティモール渡航時は、首都ディリにあるモタムティン集落で聞き取り調査を実施したほか、カトリックとローカルな信仰の動態を見定めるべく、エルメラ県やボボナロ県も訪問して主に聖職者を中心とした聞き取り調査を実施した。これらの現地での聞き取り調査の他に、先行研究に関する文献研究を継続的に実施した。

4. 研究成果

本研究を通じて、モタムティン集落における土地や家屋の賃借と売買がどのような社会関係に基づいて行われているか、多様な出自を持つ人びとがどのようにして東ティモール国民として想像されているか、の二点が明らかになった。

土地や家屋の賃借と売買

多様な出自を持つ人びとからなるモタムティン集落において、その居住状況に関する聞き取り調査を行った。これによって1999年の住民投票から2002年までの時期に、モタムティン集落の居住状況が変わったことが推察された。同期にインドネシアからの独立に反対した人びとの多くは、家屋を置いてインドネシア領に逃れたため、家屋や土地の所有者が不在となった事例が見受けられた。これらの家屋や土地に、ディリの他地区や地方からの移住者が住んでいる。

移住者たちのモタムティン集落での居住は、a.故郷の共有による紐帯およびb.独立運動に参画した人びとの紐帯に基づいている。特に居住に際しての土地や家屋の賃借と売買がこれらに基づいて行われ、その後の支払いや日常的な互助を通じて、これらの紐帯が維持されていることが明らかになった。

a. 故郷の共有による紐帯

モタムティン集落への居住に際して、住居の所有者や近隣住民が同一の出身地である事例が多く見られた。出身地を同じくする集落内の有力者を頼って居住する事例では、チェーンマイグレーションとも呼ぶべき状況が看取された。集落内に居住する西部エルメラ県やボボナロ県出

身の有力者が、自らの所有を主張する土地や家屋について、住人との間で売買契約を取り交わしている事例が見いだせた。また、土地の所有権に関する法的根拠が未整備であるがゆえに、出身地における親族関係や友人などの社会関係が、取引の際の信頼の根拠とされていた。

b. 独立運動に参画した人びとの紐帯

独立運動にコミットしたとされる特定のグループ名が聞き取り調査において、たびたび言及された。同グループのリーダー格の男性は現在もモタムティン集落に居住しており、現在も日常的に社会関係を維持している。かれらによると、インドネシア統治時代にモタムティン集落内に複数の抵抗グループが活動拠点を持っていた。集落の位置する地区は現在のように住居が多く建てられておらず、監視の目を避けるために好適であったため、活動拠点が置かれた。こうした拠点で活動していたメンバーたちは、「13 県全てから参加者がいた」という言葉で自らの活動を特徴付けている。つまり、かれらの活動が出身地によるものではなく、インドネシアに対峙する点で汎・東ティモール的であったことが強調される。独立運動に関わった人びとは、指導者たちの斡旋によって現在もモタムティン集落内に住む者もいれば、他地区に移住した者もいるが、現在も日常的に連絡を取り合っている関係である。

信仰をめぐる紐帯

モタムティン集落は、マーシャルアーツグループ (MAGs) と呼ばれる若者たちによる暴力的な衝突が頻発した場所である (上田 2018)。潜在的な治安の悪さは、独立後に移住者たちが多く住み、住民同士のつながりが希薄であったことが主因とされる。

治安回復の試みがいくつか模索されるなかで、2015 年に行われた和解儀礼は、若者による暴力に一定の抑止効果をもたらした (上田 2018)。本調査の実施期間においてもなお、治安状況が回復されたことを歓迎する声が多く聞かれた。和解儀礼は、「青年の十字架 (Cruz Joven)」と呼ばれる東ティモール国内を巡行する十字架の訪問を契機としていた。現地調査では、青年の十字架の巡行の歴史的背景や、各地での受容についてデータを収集した。

東ティモールはカトリック信者が人口の多数を占める、アジアでも稀有な国として知られる。ただし、その普及には *kultura* や *lisan* と呼ばれる在地の信仰との「共存」(Viegas 2019) が指摘されている。青年の十字架もカトリックの信仰を深めるために行われる信心業の一つであり、インドネシア支配期の 1993 年に、若者たちを励まし勇気づける目的で東部バウカウで導入された。同地で祝福を受けた木製の十字架は一年ごとに東ティモールの三つの小教区 (ディリ、マリアナ、バウカウ) を巡って、各地で若者たちを中心とした熱烈な歓迎を受ける。ただし、東ティモールにおけるカトリックが在地信仰との共存によって普及したように、青年の十字架の装飾や各地での受入状況についても同種の共存が看取できる。

青年の十字架の巡行は国内の三つの小教区を結びつけており、カトリック信仰を通じた国民としての一体性を人びとに想起させる。いっぽうで、青年の十字架がもたらす種々の呪術的效果は、各地を巡る過程で人びとの間で共有されていく。青年の十字架がモタムティン集落の和解儀礼において一定の効果を見たことは、カトリック信仰のみならず呪術的效果に見られる在地の信仰が、人びとの求心力たり得ることを示している。出身地の同一性や、独立運動で育まれたものだけでなく、東ティモールにおける共存する信仰の共有による共同体も、都市集落で想像されていることが指摘できる。

< 引用文献 >

Malkki, L. (1995) "Refugees and Exile: From "Refugee Studies" to the National Order of Things," *Annual Review of Anthropology* 24: 495-523.

上田達「東ティモール・ディリの都市集落における和解行事と 2 つの信仰」『南方文化』第 44 輯、49-67 頁。

Viegas, Susana de Matos and Rui Graça Feijó (2019) "Funerary Posts and Christian Crosses: Fataluku Cohabitations with Catholic Missionaries after World War II", in Ricard Roque and Elizabeth G. Traube (eds.) *Crossing Histories and Ethnographies: Following Colonial Historicities in Timor-Leste*, NY: Berghaan Books.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 4件／うち国際共著 1件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 James Thomas Collins, Karim Harun and Toru Ueda	4. 巻 27(4)
2. 論文標題 Exploring Medical Terminology in Miyatake 's Malay-Japanese Dictionary (1942)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Pertanika Journal of Social Sciences & Humanities	6. 最初と最後の頁 2285-2298
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Toru Ueda	4. 巻 43(3)
2. 論文標題 Reiterated Encounter : On a Reconciliation Ceremony at the Urban Settlement in Dili, Timor Leste	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Bulletin of the National Museum of Ethnology	6. 最初と最後の頁 351-366
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 上田達、James T. Collins、Karim Harun	4. 巻 25
2. 論文標題 宮武正道によるマレー語辞書の特徴に関する覚え書き	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 摂大人文学	6. 最初と最後の頁 137-158
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 上田達	4. 巻 44
2. 論文標題 東ティモール・ディリの都市集落における和解行事と2つの信仰	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 南方文化	6. 最初と最後の頁 49-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 上田達	4. 巻 35
2. 論文標題 主権回復を問い直すことから見えること	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Occasional Papers	6. 最初と最後の頁 41-44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 上田達
2. 発表標題 主権回復を問い直すことから見えること
3. 学会等名 東ティモール民主共和国 < 主権回復 > 20周年記念シンポジウム
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Toru Ueda
2. 発表標題 “Cruz Joven (Youth Cross) in Timor-Leste: How the Cross travels around districts?” ,
3. 学会等名 International Conference TLSA-PT 2020 (Timor-Leste Studies Association) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Toru Ueda
2. 発表標題 Bearing Faith and Wearing Belak: A Study on the Belief in Contemporary Timor-Leste
3. 学会等名 The International Convention of Asia Scholars (ICAS11) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 上田達
2. 発表標題 和解の軌跡 - 東ティモール・ディリにおける暴力と信仰
3. 学会等名 東南アジア学会第99回研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Toru Ueda
2. 発表標題 The Ceremony of Reconciliation and Two Belief Systems in the Urban Settlement of Dili, Timor-Leste
3. 学会等名 An International Conference of Timor-Leste Studies Association -Brazilian Chapter
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Toru Ueda
2. 発表標題 Reiterated Encounter: On the ceremony of reconciliation at the urban settlement in Dili, Timor-Leste
3. 学会等名 An International Symposium on Nationalism in Timor Leste (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 Akihisa Matsuno et al.(eds.)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 TLSA PT 2020	5. 総ページ数 314
3. 書名 Timor-Leste: A Ilha e o Mundo	

1. 著者名 栗本 英世、村橋 勲、伊東 未来、中川 理、加藤 敦典、賈玉龍、李俊遠、森田 良成、椿原 敦子、岡野 英之、上田 達、木村 白、早川 真悠、藤井 真一、竹村 嘉晃	4. 発行年 2022年
2. 出版社 大阪大学出版会	5. 総ページ数 312
3. 書名 かかわりあいの人類学	

1. 著者名 ジョン・スコット、白石 真生、栃澤 健史、内海 博文	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 376
3. 書名 キーコンセプト 社会学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------